福祉系大学における資格を取得しない学生に対するキャリア教育の現状と課題

Current Situation and Issues of Career Education for University Students without Qualification Intention in Department of Social Welfare

清野　絵
Kai SEINO

1．はじめに

本稿では、大学におけるキャリア教育のうち特に福祉系大学において社会福祉士の国家資格の取得を目指さない学生に対するキャリア教育の現状と課題について、自由記述データに対するKJ法による分類と分析で検討を行った。なお、ここでいう福祉系大学とは社会福祉関係の専門職を養成するためのコースが設置されている大学のこととする。近年、多くの四年制の福祉系大学において卒業生の半数以上が福祉・医療系ではなく、福祉と直接の関係はない一般企業等に就職しているという現状がある（一般社団法人日本社会福祉教育学校連盟　2013）。そのような中で、資格の取得を目指さない学生に対してのキャリア教育がより重要となってきている。

近年、福祉系大学に限らず全ての大学においてキャリア教育がより重要となっている。中央教育審議会答申「今後のキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成23年１月31日）では、キャリア教育が、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であると定義されるとともに、今後の大学におけるキャリア教育の課題と方向性が示された。さらに、平成23年４月１日には大学設置基準が改正され、「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が追加された（大学設置基準第42条の２）。その中で、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」と規定されている。こうした中で、大学においては、社会的・職業的自立に関する指導について、教育課程を通じてそれぞれの個性・特色や学問分野に応じた取組を行うほか、学生に対する各種の職業意識の形成や就職支援を行うことが求められている。また、大学・短大への進学率が50％を超えたことを背景と

したいわゆる「大学教育のユニバーサル化」（M. トロウ　1976）により、大学教育におけるキャリア教育の必要性も高まっている。

本稿では、福祉系大学の資格を取得しない大学生を対象にしたキャリア教育の現状と課題について検討することを目的に、キャリア教育の一つである実際の福祉系団体・企業の外部講師による講義後の学生の学んだこと・感想の内容についてその特徴を明らかにする。

2．方法

2.1　対象

対象者は社会福祉士養成を行っている首都圏私立大学の福祉系学科の学生のうち、社会福祉士の国家試験受験資格の取得を目指さないコースの２年生である。人数や属性は以下のとおりある（表１）。

2.2　方法

２年次の必修である演習授業におけるキャリア教育関連の講義の履修者に講義終了後に記入用紙を配布して、自由記述で学んだこと・感想を記述してもらい回収を行った。講義は福祉系の団体や企業の外部講師による講義およびグループワーク・ディスカッション等である。講義終了後、学生は体験学習として講義を行った福祉系の団体や企業における職場見学・体験を１か所以上で行うというカリキュラムの流れとなっている。外部講師の事業内容・事業形態は以下のとおりである（表１）。

表１　対象と方法の詳細

団体・企業の事業内容（事業形態）		講義の内容	対象者
高齢者関係	１．有料老人ホーム①（株式会社）	サービス業としての介護、介護系企業におけるキャリア	43名（男性20名、女性23名）
	２．有料老人ホーム②（株式会社）	認知症を学ぶ、介護の仕事	48名（男性21名、女性27名）
	３．高齢者デイサービス（株式会社）	日本の介護事情、営利企業における福祉活動、福祉系企業におけるキャリア	43名（男性19名、女性24名）
	４．高齢者配食サービス（社会福祉法人）	食べるということ、食事サービスとボランティア	42名（男性16名、女性26名）
５．被災地支援・障害児・者支援・高齢者支援・保育園等（非営利活動法人・協同労働）		協同労働という働き方、子育て支援事業	43名（男性20名、女性23名）
６．障害児支援（非営利活動法人）		障害児の余暇支援・外出支援、起業および非営利活動法人でのキャリア	42名（男性19名、女性23名）
７．ホームレス支援（非営利活動法人）		路上生活者に対する福祉活動	46名（男性22名、女性24名）

3．結果

回収した自由記述の内容について、 KJ 法（川喜多1967、川喜多1970）に従って分類、分析を行った。

3.1　講義後の自由記述の結果とサブカテゴリー

自由記述の回答に関して、それぞれの団体・企業の講義ごとの回答を要約したものを「単位」として「」内に示す。また、単位に分類することにより生成されたサブカテゴリー名を〈〉内に示す。なお、サブカテゴリーに含まれる単位数を（）内の数字に示す。

（1）有料老人ホーム①

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「『介護が嫌い、介護をしない』という従来の介護のイメージを変える企業の姿勢に興味、関心を持った」等の〈企業理念〉(10) についてと「介助や介護ではなくサービス業であるということが理解できた」「有料だからこそできることで、公的サービスでは難しい」等の〈事業内容の理解〉(10) についてであった。次いで、「講義を聞いて介護の仕事に興味、関心を持った」等の〈キャリアの選択肢の広がり〉（9）や、「リスクをとっても利用者のニーズや意志を最大限尊重しようとする利用者のための姿勢に感銘を受けた」等の〈利用者本位〉（8）、「講義を聞いてこれまで持っていた介護のイメージが変わり、明るい楽しいイメージを持つことができた」等の〈新しい介護イメージ〉（8）といった回答が見られた。

（2）有料老人ホーム②

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「認知症は本人だけでなく忘れられる家族も大変」「認知症について理解できた」等の〈認知症への理解〉(28) についてであった。次いで、「介護の具体的な話を聞いて介護に対する捉え方が変わった」「とてもおしゃれなケアやセラピーを取り入れていて、今までの介護のイメージと違うので驚いた」「介護は大変で力仕事で笑顔もなくなるというイメージがあったが介護を受ける人もする人も明るくて楽しそうで驚いた」等の〈新しい介護イメージ〉(13) や、「施設らしさをなくすためユニフォームを着ないというのは素晴らしい」「認知症に対して積極的ケアを行っていていい会社だと思った」等の〈良いサービス〉（4）、その他に「有料なのでやはりお金のことが気になる」等の〈心配〉（1）等の回答が見られた。

（3）高齢者デイサービス

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「介護でもボランティアではなくビジネスとして成り立つことがわかった」等の〈新しい介護イメージ〉(11) についてであった。次いで、「介護業界といっても介護の仕事だけではなく、様々な職種があることがわかった」等の〈職種〉(10)

や「介護は待遇が悪いというイメージがあった」等の〈これまでの介護イメージ〉（9）、「進路として考えたい」等の〈キャリアの選択肢の広がり〉（7）、「将来のキャリアを考えるために体験学習やインターンシップをしっかりとしたい」等の〈体験学習への意欲〉（6）、「営利企業としての介護の仕事が理解できた」等という〈事業内容の理解〉（5）や「視野が広がった」という〈視野の広がり〉（4）等について回答が見られた。

（4）高齢者配食サービス

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「食事の配達を通して高齢者の安否確認や孤立を防止するとても重要な活動であると思った」「給食を媒体として高齢者のサポートをしていて社会に役に立つ仕事だと思った」等の〈事業の重要性〉(21) についてであった。次いで、「ボランティアが交流や生きがいづくりの場にもなっていることを理解した」等の〈ボランティアの役割や意味〉(15)、「高齢者の栄養バランスを保つために配食サービスは重要」等の〈事業の意味〉(13)、「食の大切さを改めて知った」「食事は栄養バランスだけでなく楽しさや生きがいを感じるためにも大切」等の〈食の重要性〉(10)、「男性の料理はかっこいい」「男性の料理教室を開いたのはすごい」等の〈男の料理〉（6）、「高齢者の孤独死は問題」等の〈問題意識〉（6）、「家族に高齢者がいるので親近感を持った」「祖母がいるので利用したい」等の〈親近感〉（4）、「このような仕事があることを初めて知った」等の〈仕事〉（4）等について回答が見られた。

（5）被災地支援・障害児・者支援・高齢者支援・保育園等

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「NPO 法人がどういう活動をしているか理解できた」「協同労働という働き方があることを知った」「NPO 法人は地域のニーズを理解して活動することが重要だと理解した」等の〈事業内容の理解〉(19) であった。次いで、「高齢者、障害者、児童等、幅広く活動していることを知った」「様々なジャンルの福祉活動をしていてすごいと思った」等の〈多様な活動〉（9）や、「何ができるかわからないが今ある問題と向き合いたい」「保育園不足といった問題があることがわかった」等の〈問題意識〉（8）、「ボランティアをして様々な体験をしようと思った」等の〈体験学習への意欲〉（5）、「こういう仕事があるんだとわかり、ＮＰＯ法人に興味がわいた」等の〈キャリア選択〉（3）等について回答が見られた。

（6）障害児支援

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「障害児が身体を動かすことは大事」「このような活動は親にとっても子供にとっても役に立つ」「障害児に水泳を教えることはとても難しいと思うが、このような活動をしているのはすばらしい」という〈事業の重要性〉(24) であった。次いで、「私もスポーツが好きなので興味を持った」等という〈興味・関心〉（8）や、「このような活動があるのをはじめて知った」等の〈知識〉（4）や、「障害児に外で活動する機会を提供することはと

てもやりがいがある仕事だと思った」等の〈仕事への関心〉（3）、その他に「福祉とスポーツという意外な組み合わせだが、このような柔軟な福祉の在り方もあると知った」等の〈福祉のイメージ〉（1）等について回答が見られた。

（7）ホームレス支援

講義で学んだこと・感想のうち、最も多かった回答は、「病院に行きたくても経済的な問題で行けない人もいる無料診療の実施はすばらしい」「生活困窮者にとって必要な支援だと思う」等の〈事業の重要性〉(15) であった。次いで、「実際にインターンシップで経験してみたいと思った」「ホームレスになった経緯を知りたい」等の〈興味・関心〉) (11)、「ホームレスを見ると怖い、不潔と思っていたが考えが変わった」「自分は偏見を持っていた」等の〈イメージの改善〉（8）、「役に立ちたい」「何ができるか考えたい」等の〈問題意識〉（6）、人と人とのつながりが大事」等の〈つながりの大切さ〉（5）等について回答が見られた。

3.2　講義後の自由記述の結果と大カテゴリー

講義で学んだこと・感想について、それぞれの団体・企業の講義ごとの自由記述の回答から生成された全てのサブカテゴリーを集約して大カテゴリーを生成した。結果を表2に示す。なお、生成された大カテゴリー名を以下《》内に示す。

社会福祉を専攻しているが社会福祉士の国家試験受験資格の取得を目指さない学生が福祉系団体・企業の外部講師の講義を受講して学んだこと・感想の内容は、その他を除いて大きく6つのグループに分類された。1つ目の大カテゴリーは、《企業（団体）・事業内容の理解》に関するものである。2つ目の大カテゴリーは、《福祉業界の理解》に関するものである。3つ目の大カテゴリーは、《職業・職種の理解》に関するものである。4つ目の大カテゴリーは、《キャリア形成関係》に関するものである。5つ目の大カテゴリーは、《事業に関する知識》に関するものである。6つ目の大カテゴリーは、《学習や活動への意欲・関心》に関するものである。

このように分類、生成された6つの大カテゴリー間の関係性について、図式化したものを図1に示す。

4．考察

本稿では、福祉系大学の資格を取得しない学生が福祉系団体・企業の外部講師による講義から学生がどのようなことを学んだのかをKJ法を用いて分類、分析を行った。はじめに各講義ごとの自由記述の結果を整理した結果、たとえば有料老人ホーム事業を行っている外部講師の講義では「認知症について知ることができた」、高齢者配食サービスを行っている外部講師の講義では「食の大切さを

表２　学生が講義から学んだこと・感想の内容

大カテゴリー	サブカテゴリー（単位数）	単位（例）
企業（団体）・事業内容の理解	事業の重要性（60）	「社会に役立つ仕事だと思った」
	事業内容の理解（34）	「公的サービスでは難しい」 「営利企業の事業を理解できた」
	事業の意味（13）	「高齢者の栄養バランスを保つために配食サービスは重要」
	企業理念（10）	「企業の姿勢に興味関心を持った」
	多様な活動（９）	「様々なジャンルの福祉活動をしていてすごいと思った」
	利用者本位（８）	「利用者のニーズや意志を最大限尊重する利用者のための姿勢に感銘を受けた」
	親近感（４）	「家族に高齢者がいるので親近感を持った」
	良いサービス（４）	「積極的なケアを行っていていい会社だと思った」
福祉業界の理解	新しい介護イメージ（33）	「今までの介護のイメージと違うので驚いた」
	これまでの介護のイメージ（９）	「介護は待遇が悪いというイメージがあった」
	福祉のイメージ（１）	「柔軟な福祉の在り方を知った」
	イメージの改善（８）	「自分は偏見を持っていた」
職業・職種の理解	職種（10）	「介護といても様々な職種があることがわかった」
	仕事（４）	「（高齢者配食サービスについて）このような仕事があることをはじめて知った」
	知識（４）	「（スポーツを通じた障害児支援について）このような活動があるのをはじめて知った」
キャリア形成関係	キャリアの選択肢の広がり（19）	「仕事に興味関心を持った」
	視野の広がり（４）	「仕事について視野が広がった」
	仕事への関心（３）	「とてもやりがいのある仕事だと思った」
事業に関する知識	認知症への理解（28）	「認知症について理解できた」
	ボランティアの役割と意義（15）	「ボランティアの交流と生きがいづくりの場にもなっている」
	食の重要性（10）	「食の大切さを改めて知った」
	つながりの大切さ（５）	「人と人のつながりが大事」
	男の料理（６）	「男性の料理教室を開いたのはすごい」
学習や活動への意欲・関心	興味・関心（19）	「私もスポーツが好きなので（スポーツを通じた障害児支援）に興味を持った」
	体験学習への意欲（11）	「体験学習やインターンシップをしっかりとしたい」
	問題意識（17）	「高齢者の孤独死は問題」
その他	心配（１）	「有料老人ホームなのでお金のことが心配」

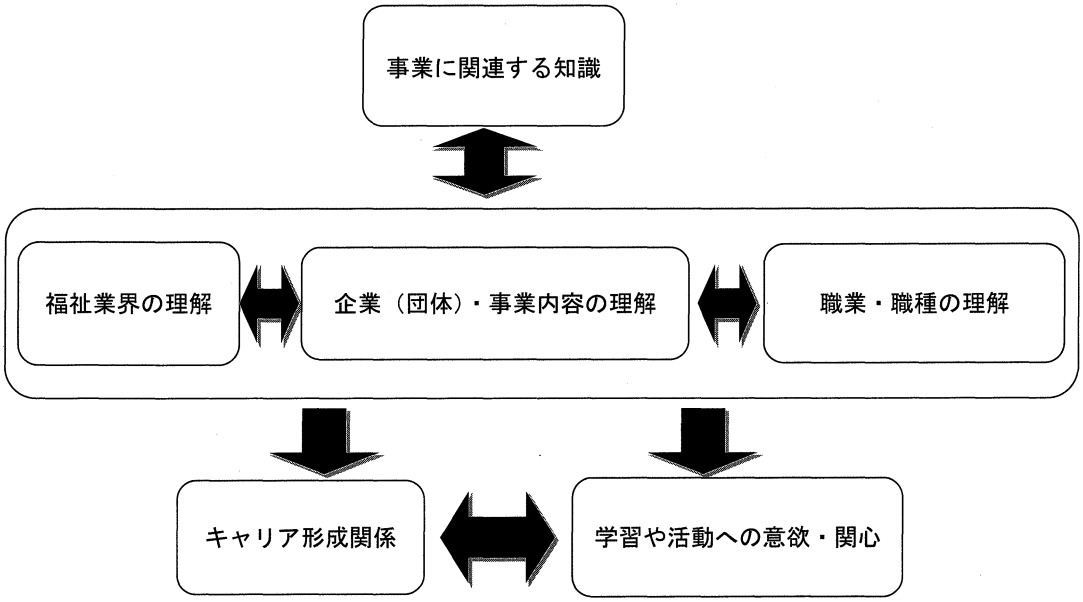

図１　学生が講義から学んだこと・感想の内容における関係性

知った」、また全体として講義と関連した社会問題を意識、考えることがあったように各団体・企業の講義内容や企業理念を反映した結果となった。このことは、福祉を学んでいる学生でも福祉に関する知識や社会問題について知らないことや、改めて意識することがあることが確認できた。次に、全ての講義の自由記述の結果を整理した結果、大きく分けると職業観に関わる《企業（団体）・事業内容の理解》、《福祉業界の理解》、《職業・職種の理解》、《事業に関する知識》と、進路選択する力に関わる《キャリア形成関係》《学習や活動への意欲・関心》に分類できた。このことは、キャリア教育を目的の一つとして行われた福祉系団体・企業の外部講師による講義が、学生の職業観の育成、進路選択する力の育成に影響を与えており、一定の効果があったことを示唆していると考えることができる。次に、生成した大カテゴリー間の関係を整理してみると、《企業（団体）・事業内容の理解》、《福祉業界の理解》、《職業・職種の理解》は職業観を形成するものとして相互に関係していると考えられる。また《事業に関する知識》は、事業に関することであり、職業観を補強するものとして《企業（団体）・事業内容の理解》と相互に関係している。また、それらの職業観を形成するものは、結果として《キャリア形成関係》や《学習や活動への意欲・関心》と相互に関連している。なぜならば、学生は業界、企業（団体）・事業内容、職業・職種についてはじめて知ったり、また新しいイメージを持つことで、進路として、また学習の対象として興味・関心を持っているからである。また、《キャリア形成関係》と《学習や活動への意欲・関心》も相互に関連していると考えられる。

全体として、業界や企業（団体）・事業、職業・職種について重要性や仕事内容の詳細等を正確に知ることで学生のキャリア形成に関する関心や意欲につながることが確認できた。また、学生は福祉に関して従来からある社会福祉法人等の事業や業務については知識はあるものの、株式会社等の営利

企業における福祉の事業や、非営利活動法人の事業や業務についてはイメージも知識も少ないことが推測された。さらに、福祉に関する職種についても介護や直接的な対人援助の仕事のイメージはあるが、組織の中で営業や企画、事務等、様々な職種があることの理解がほとんどないことも推測された。したがって、学生の職業観を育成するためには、幅広い福祉の活動や関連する職種について知る機会を提供していくことが重要だと考える。今後は、職場体験等の体験学習を通じて職場を知り実際の利用者と関わることで職業や職種について理解することや、社会人として必要な能力や態度、キャリアを自ら形成していく力を身につけることが期待される。このように、福祉を専攻する学生に対して福祉系団体や企業と協働したキャリア教育を行うことは、社会福祉の知識や理解を深めることと同時に、将来の進路や職業を考えるうえで意義があることが示唆され、今後もこれらの講義や職場体験も含め様々なキャリア教育を学生に提供することが大学としても求められていると考える。

引用文献

文部科学省（2008）『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（諮問）』
川喜田二郎（1967）.『発想法―創造性開発のために』中央公論社.
川喜田二郎（1970）.『続・発想法―KJ 法の展開と応用』中央公論社.
M. トロウ「高学歴社会の大学―エリートからマスへ―」東京大学出版会1976
一般社団法人 日本社会福祉教育学校連盟（2013）『社会福祉系学部・学科卒業生の進路等調査報告書』

【Abstract】

Current Situation and Issues of Career Education for University Students without Qualification Intention in Department of Social Welfare

Kai SEINO

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology suggests enhancement of students' motivations for work and their desires to learn skills for the job as one of the basic directions of career education at school. Therefore, career decision making courses and curriculum studies should be a mutually complementary system. Career experiences like internship experiences must be promoted to enhance motivations to study the subjects related to the job. Moreover, depending on the stage of career development, children (students) should be supported appropriately by career counselors. Finally, it is assumed that instructions to provide qualities as a member of society from the early stage of life would promote career education.

This paper aims to clarify the issues of career education for university students who don't intend to acquire qualification in the social welfare subject at the Department of Social Welfare. The effects of the career education were clarified based on their free description-style essays after career experiences.